

ニホンジカの鳴声はニホンジカを呼び寄せるのか？ ～咆哮データを用いた低密度分布域における検証～

東北森林管理局 秋田森林管理署湯沢支署 総括事務管理官 盛 一樹
(元 藤里森林生態系保全センター 生態系管理指導官)
藤里森林生態系保全センター 所長 山本 毅

1 背景と目的

近年、世界自然遺産白神山地周辺地域では、ニホンジカ（以下、シカ）の目撃回数が増加傾向にあり、森林生態系への影響が懸念されます。低密度下ではシカ個体の検知さえ容易でない中、効率的な捕獲方法・体制が重要となります。その方法の一つとして餌による誘引捕獲が挙げられますが、低密度下における研究事例は少なく、その効果は分かっていません。本研究では、オスジカの鳴声に似た音が鳴る笛を吹くことでシカを誘引する鹿笛猟（コール猟）に着目し、シカ咆哮データによるシカ誘引効果の検証を行いました。

2 材料と方法

実験地区は、白神山地周辺地域にある林道沿線で、2023年5月下旬～11月上旬まで、24時間稼働センサーカメラを6地点に設置しました。内2地点は対照地とし、内4地点は試験地としてシカ咆哮データの再生機器を設置しました。咆哮データは、いずれも発情期にオスが発するハウル（howl）およびモウン（moan）というデータを使用し、シカ繁殖期に合わせ2023年9月下旬～11月上旬まで、それぞれ2地点において再生機器により再生しました。

3 結果

6地点の内、シカが撮影されたのは3地点でした。

撮影回数は、対照地aで8回（♂5♀2不明1）、咆哮再生地aで7回（♂6不明1）、咆哮再生地bで1回（♂）でした。

撮影時期は、対照地aで繁殖期前に5回と繁殖期に3回、咆哮再生地aで7回全てが繁殖期、咆哮再生地bの1回は繁殖期前でした。

4 考察

まずは、実験地区以外も含めた白神山地周辺地域（秋田県山本郡藤里町内国宥林）に、概ね170日間設置したセンサーカメラ17台に、シカが撮影された100日当たり回数を図-1に示します。最大値を示した地点でも100日当たり4.7回、また1回も撮影されなかった地点が8地点あり、東北地方の中でも比較的シカの低密度分布域であると考えられます。

実験結果からは、撮影回数が多かった2地点の内、対照地aでは性別及び撮影時期に規則性がみられないこと、6地点の中で唯一、シカなどの野生動物が身を隠すのに適した枝下高3m程度の若齢スギ林（約2.6ha）が隣接していることから、シカが日頃付近に滞在している可能性が考えられました。

一方、咆哮再生地aでは、性別不明（頭部が写っていないため不明としたものの体色からは繁殖期のオスに見える）1個体を除きすべてオスであったこと、撮影された7回が全て咆哮データ再生期間中であったこと、同一個体が採食することもなく20分弱の間咆哮再生地a付近を徘徊し、「その場所に執着」しているのではないかと考えられる様子が撮影されたことから、再生機器から発せられる咆哮にオスジカが反応を示し、呼び寄せられた可能性が示唆されました。シカが視覚あるいは嗅覚で感知しないと存在に気付かない給餌法に比較して、本研究の手法では遠くまで音声が届くため、より広範囲のシカを誘引し、シャープシューティングや、くくりわななどの捕獲器具との組み合わせにより、白神山地に限らず、守るべき森林周辺の低密度分布域における効率的な捕獲に繋がるのが期待されます。

また、低密度分布域であるがゆえにサンプル数は多くありませんでしたが、高密度分布域とはシカ発情期に山野に響く咆哮密度も違いますので、引き続き低密度分布域における誘引効果の検証を行う必要があります。

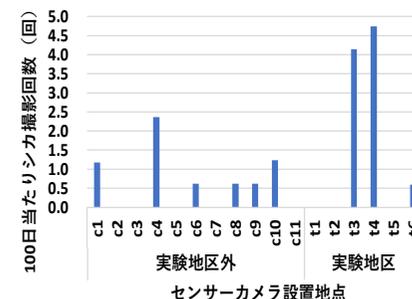


図-1 センサーカメラ稼働100日当たりシカ撮影回数